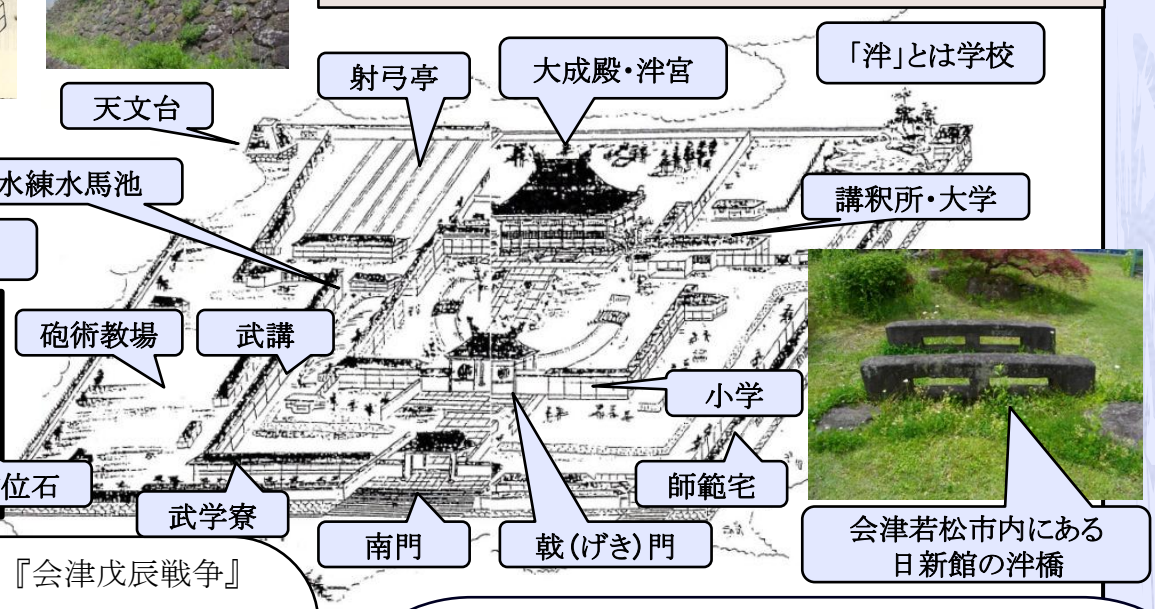
会津藩校「日新館」と戊辰戦争

会津若松市河東町南高野には、会津藩校「日新館」が復元されています。 電話　0242-75-2525(年中無休)
米代には、天文台跡(市史跡)が残っています。



会津若松市内にある
日新館の泮橋

○平石弁蔵『会津戊辰戦争』によると
慶応4年（1868）8月「各方面から傷病者が運ばれてくるので、日新館を臨時病院に宛てて収容し、幕府の医者松本良順が院長として、蘭法治療を施した。この時、牛馬を屠殺（とさつ）して、患者に食したのが、会津地方における肉食の始まり」
○山川健次郎『会戊戦史』によると
8月23日、「西出丸より火箭（ひや）を射て之を焼く、傷兵歩することを得たる者は城に入り、歩する能（あた）はざる者は自刃す」と、会津藩で火を放っています。
　籠城戦中、傷病者に給する食物は、照姫が監督。本丸西隅に炊事場を設けた。羹蔬（こうそ・野菜を煮た汁）魚肉鶏肉牛肉等を添え病室に運ぶ。　　文責　石田明夫

　寛政10年(1798)、会津藩家老田中玄宰の進言により計画。財政難により進まなかったが、会津藩御用商人の須田新九郎が私財を寄付し、享和3年(1803)に完成。東西約120間、南北およそ60間あった全国屈指の藩校。
　藩士の子は10歳になると日新館に入学。15歳までは素読所(小学)に属しました。素読所を修了した者で成績優秀者は講釈所(大学)への入学が認めます。さらに優秀な者には江戸や他藩への遊学が許されました。嘉永5年(1852)2月6日には吉田松陰が訪れています。
　講釈所(大学)では、日本で最初の給食、お握り、汁、漬物、たまに秋鮭の給食を出しています。
　戊辰戦争で焼失し、半分だけとなった天文台跡が今でも若松城西の日新館跡地に残っています。
町内には6歳から9歳までの「什」という藩士の子弟の集団がありました。各時の家が順番に提供された会合の「遊び」で、座長の「什長」が心得「什の掟」を話します。
一、年長者の言うことに背いてはなりませぬ
二、年長者には御辞儀をしなければなりませぬ
三、虚言をいふ事はなりませぬ
四、卑怯な振舞をしてはなりませぬ
五、弱い者をいぢめてはなりませぬ
六、戸外で物を食べてはなりませぬ
七、戸外で婦人と言葉を交えてはなりませぬ